前期：キリスト教思想と宗教哲学

オリエンテーション――宗教哲学とその基本問題

１．宗教哲学の歴史と伝統　２．理性と啓示　３．悪と神義論　（４．予定と自由意志）

５．形而上学と神

６．シュライアマハー

７．トレルチ　5/29

８．ティリッヒ　6/5

９．ブーバー　6/12

１０．波多野精一　6/19

１１．リクール　6/26

１２．研究発表１　7/3

１３．研究発表２　7/10

１４．研究発表３　7/17

１５．研究発表４　7/24

＜前回＞形而上学と神

（１）キリスト教と神観念の複合性

１．絶対的なものとしての神と形而上学的思惟

・キリスト教とその神思想とおける、ヘブライズムとヘレニズムの二重性。

聖書の宗教とギリシャ哲学（形而上学）→キリスト教

２．ヘブライズムとヘレニズム

・19 世紀。キリスト教的伝統を構成する複合性についての意識。近代における、ギリシャ的近代的伝統との差異化におけるユダヤ的キリスト教的伝統の再発見。

３．キリスト教神学の形成過程

・ヘブライズムとヘレニズムとの緊張関係におけるキリスト教の成立。

キリスト教のギリシャ化（ハルナック）あるいはギリシャ・ローマ文化世界のキリスト教化。Ingolf U. Dalferth, *Theology and Philosophy*, Basil Blackwell, 1988.

（２）聖書の神と形而上学的神との緊張関係

４．ハヤ･オントロギア

・有賀鐵太郎：ヘブライズムとヘレニズムのそれぞれの思考の核心を、オントロギアとハヤトロギアとして論じた上で､キリスト教を両者の動的関係体としてのハヤ･オントロギアと説明。

５．聖書の宗教と存在論的思惟

・ティリッヒ『聖書の宗教と存在の問い』(「聖書の宗教と存在の問題」『ティリッヒ著作集第四巻』野呂芳男訳、白水社、一　九七九年、一九四―二五八頁。（Paul Tillich, *Biblical Religion and the Search for Ultimate Reality*（1955）, in: *Paul Tillich. MainWorks*.4,de Gruyter, pp. 357-388.））

・同書におけるティリッヒの基本的な意図は、聖書的思惟とギリシャ的哲学的思惟（存在論）との差異性あるいは緊張関係を明確にした上で､「両者は究極的には一致し、相互に依存しあっている」（同書、一九四頁）事態を明らかにすること。

・西谷啓治『宗教とは何か』（創文社、1961 年）

「非「人格的」な人格的関係、或は「人格的」な非人格的関係」(同書、47)

「上に挙げた三つの問題点は根本において一つに結びついて居り、そこから溯れば問題は

更に神の人格性、従ってまた人間の人格性といわれる観念にまで及ぶ。」（同書、231）

（３）神の絶対性と形而上学批判

７．宇宙論的な強い神

・聖書の宗教と古代ギリシャの哲学的思惟→強い神と言うべき神概念の成立。
　両者が宇宙論という枠組み共有していたから。

・ルドルフ・オットー：聖なるものの経験の原初的事態としてのヌミノーゼ。

・「強い神」のキリスト教思想において多様な展開。
　「無からの創造」論、宗教改革期の神の独占的活動性、そして二重予定説。

・キリスト教神学の学的前提としての古代ギリシャの哲学的神学の伝統の作用。
　アリストテレス『形而上学』の「不動の動者」→「神の不可受苦性」の思想。
　最高存在・最高価値としての神（最上級の神）の成立。

・西欧思想における神と人間存在の相関関係（一方における「神の像」、他方における投影理論）

明証的で確実な知の基盤としての近代的自我は全包括的で強力な支配者としての神との相関性にある。近代の世俗化は、絶対的な神との相関から離脱して自己に収斂する近代的自我の展開過程、またそれに伴う世界における人間の自己理解の変動にほかならない。

８．ハイデッガーの形而上学批判

・形而上学とは、「存在するものとして存在するものを思惟すること」（ibid., 8）であるが、それは、「存在するものを存在するものとして問うがゆえに、存在するものにとどまり、存在としての存在には向かわない」（ibid.）。したがって、「存在の真理は形而上学にとっては隠されている」（ibid., 11）。この「存在するものと存在との混同」「存在忘却」（Seinsvergessenheit）（ibid, .12）において、形而上学は、存在するものの存在性（Seiendheit）を二重の仕方で表象する。

↓

一方では、存在するものの全体を、その最も普遍的な特徴の意味において（存在論）、他方では、最高の従って神的なものの意味において（神論）。ここから、形而上学的思惟が狭義の存在論であるとともに神論であるという二重の性格、「存在―神論的本質」を有していることが明らかになる（ibid., 19）。

・キリスト教的西洋世界における思惟世界を形成：いわばそれ自体が、存在の「性起」（Ereignis）、「存在の命運」（Seinsgeschick）として生起した。

９．キリスト教思想と形而上学再考

・近代以降の宗教批判は、キリスト教思想に伝統的な神理解の再考を迫るものとなった。

しかし、形而上学はあらゆる意味で終焉を迎えたのかは、決して自明ではない。むしろ、キリスト教思想においては、現在、脱形而上学的思惟と形而上学批判以後の形而上学再考の試み（たとえば、パネンベルクやプロセス神学）とが交錯している。

・脱形而上学的思惟と形而上学批判以後の形而上学再考とのいずれが真理か？
　ハイデッガー哲学自体の真理性はどこで決せされるのか。
　　一つの自己完結的な思惟味世界（外部批判の排除＝免疫機構）あるいは言語ゲーム。
　　日常的経験世界（生活世界）という共通基盤。
　↓

・キリスト教思想では、聖書的宗教という基準が設定できる。では、宗教哲学では？

（４）弱き神と聖書の神思想

（５）絶対性の新しい理解を求めて

６．シュライアマハー

（１）シュライアマハー(Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834)の特徴

１．シュライアマハーとはいかなる思想家か

①近代プロテスタント神学の父

啓蒙主義的な神学的合理主義と伝統主義との間・総合

同時に、近代的な宗教研究の広範な領域に対して、その起点となった。

近代解釈学の父、現代宗教学（宗教現象学）の父

宗教・信仰の直接的場（「感情」「直接意識」）

→　人間の存在構造における宗教性

②啓蒙思想とロマン主義の総合

カント・フィヒテ→　　ロマン主義運動→　　体系構想（神学－哲学）

ヘルンフート兄弟団　　1796(29)　　1810(42)

ハレ大学神学部（宗教的懐疑）　　ベルリン　　ベルリン大学神学部

1787(19)　　『宗教論』(Reden)『モノローゲン』

③解釈学・弁証法・倫理学、体系家　→　信仰論（『信仰論』(Glaubenslehre)）の影響

Dogmatik から Glaubenslehre へ

自由主義神学

・人間性における宗教　→　弁証神学、宗教の本質概念（本質論から現象論へ）

・実定性　→　個別的で歴史的な諸宗教への定位　　cf.　理神論

高次の実在論

説教者

↓

自由主義神学の父、しかし自由主義神学の枠には収まらない。

体系的哲学構想（『弁証法』）に裏打ちされた宗教論

方法論としての解釈学の構築

（２）『宗教論』の信仰概念

『宗教論』（筑摩書房）

第一講　弁明

第二講　宗教の本質について

第三講　宗教へ導くための教育について

第四講　宗教における集団について　あるいは教会と聖職について

第五講　さまざまの宗教について

「宗教がまっさきに心情に語りかけてくるもっとも内面的な深みへ、きみたちを案内したいのだ」(17)、「人間存在の内面へ」(18)、「きみたちが軽蔑しているこれらの体系の中には、宗教は見出されないのだ」(22)、「完全にそれ自体で独立していなければならない」(28)、「宗教はまったく独自な役目を果たさなければならない」(29)、「宗教は、人それぞれのすぐれた魂の内部から必然的に、おのずと湧き出てくるということ」(30)、「宗教は形而上学や道徳と区別すべきである」(35)、「最高の存在者、あるいは世界についてのいろいろな意見[形而上学]と、一つの（いや、そればかりか二つの）人間生活に対する命令[道徳]のごた混ぜを、きみたちは宗教と名付けているわけだ」(37)、「宗教の本質は、思惟することでも行動することでもない。それは直観と感情である。宇宙を直観しようとす

るのである。宇宙の独自な、さまざまな表現、行動の中にひたって、うやうやしく宇宙に聴き入り、子供のように受け入れる態度で宇宙の直接の影響にとらえられるよう、宇宙に充たされよう、とする」(42)、「宗教は無限なものを受け入れる感性、趣味である」(44)、「高次の実在論」(45)、「直観するとは、直観されたものが直観するものへ及ぼす影響、すなわち、直観されたものの根源的、独立的な動きに基づいている」(46)、「すべての個体を全体の部分として受け取り、すべて制約されたものを無制約的なものの表現として受け取る、これが宗教である」(46)、「世界におけるすべての出来事を神の働きと考えること、これが宗教なのだ」(48)、「すべて存在するものは、宗教にとっては、真実な、それなしではすまされない無限なものの象徴なのだ」(54)、「あらゆる直観は、その本性から感情に結び付くのである」(54)

２．信仰・宗教の規定

意図：宗教の独自性－宗教学の基礎、宗教哲学

宗教多元性の問題（第五講）

３．形而上学・倫理学との区別

宗教の本質について（宗教本質論・第二講）→「直観・感情」(「本質－現象」の枠)

①直観と感情　→　人間存在

②形而上学と道徳から区別された「宗教」の固有性

③直観：有機体的な統一的な宇宙、スピノザ的

無限と有限という関連性　→　表現、象徴

④感情「それは多様性と個性とを象徴にした無限で生きた自然という根本感情」「無限に向かう憧れ、無限に対する畏れの心」

「聖なるあこがれ」「内なる本性の呼び掛け」

（３）『信仰論』の意義

４．教義学の新しいスタイル

・経験から教義へ

・諸学の体系内における神学の位置づけの明確化

倫理学、宗教哲学、弁証学からの借用命題から神学本論へ

「神」という言葉の規定

５．『信仰論』序説(Einleitung)

「§２　教義学は神学的学科であり、それゆえもっぱらキリスト教会と関係しているのであるから、それが何であるかを説明することが可能になるのは、キリスト教会の概念について了解されている場合に限られる。」(Schleiermacher,1830, 10)

「§３　すべての教会共同体の基礎である敬虔さは、それだけで純粋に考察される場合、知や行為ではなく、感情の、あるいは直接的自己意識の規定された形態なのである。」(ibid., 14)

「§４　敬虔さの表出はたとえどんなに多様であっても、敬虔さを他のすべての感情から区別することを可能にする敬虔さの諸表出すべてに共通なもの、つまり敬虔さの自己同一的な本質は、次の点に存する。すなわち、それは、我々が自らを絶対的に依存的であると意識していること、あるいは同じことであるが、我々が自らを神との関係性において意識しているということである。」(ibid., 23)

６．シュライアマハーの議論のアウトライン

「教義学・教義→教会・信仰共同体→敬虔さ→感情・直接的自己意識→絶対的依存感情」

①教会概念、つまり敬虔さの分析は、倫理学からの借用命題によって行われる。

倫理学：自由な人間の行為によって成立する共同体、あるいは人間の生の全領域を対象とする学問

教会概念の分析：まず教会的諸共同体の基礎にある自己同一的なものと諸現象において可変的に振る舞うものとを分離し、次に多様な現象の全領域を諸現象間の類似性と段階に従って区分し、最後に歴史的に発見される個々の共同体（共同体の本質の個別的な形態化）が位置づけられるべき場を明らかにする（Schleiermacher,1830, 12f.）。

教会共同体の本質と歴史的諸現象とが学問的な仕方で把握可能になる。

②教会共同体の概念は、敬虔さ（Frömmigkeit）、感情（Gefühl）・直接的自己意識（das unmittelbare Selbstbewußtsein）に帰着する。

・教会共同体の基礎（教会共同体の自己同一的な本質）＝敬虔さ：感情という観点から規定される。感情とは意識の「状態」（Zustand）である。この意識的状態には「直接的」という規定が付与されている。

「直接性」：自己意識が表象（自己イメージなど）によって媒介され対象化されたものではないということ（直接的自己意識）。

・生（das Leben）：自己同一性の保持と自己変化の二重の運動の弁証法的統合（ibid.,S.18）

認識：受動性（触発）に基づく一つの行為（認識行為）、「自己にとどまること」（Insichbleiben）と「自己から踏み出すこと」（Aussichheraustreten）という主観の二つの形式は密接に結合。

本来的な行為（認識から区別された実践理性の事柄）：「自己の外に踏み出すこと」

感情：「自己にとどまること」という契機。

↓

・感情（直接的自己意識）は、生の弁証法において能動性がまだ現実化せず受動性のみが現れている状態、つまり、生の弁証法の起点であり、また生の運動が常にそこへ立ち戻る終点。「自己にとどまること」（自己同一性の保持）は、固有の意味においては感情に属している。認識や行為に対する感情の根源性。

③感情は自己・人格的統合の一要素である。

④認識、行為、感情は感情を基盤とした動的な相互連関において統合されている。

・敬虔さの固有の座としての感情：認識や行為から明確に区別され、認識や行為から導出されない（cf. 『宗教論』）。

・三者の構造的関係と動的関係の両面（ibid., 19-23）：敬虔さは、知識と行為を媒介する自己意識の形態であって、これを介して知識から行為への、あるいは行為から知識への移行・運動が生成する（ibid., 23）。

⑤自己意識の現象学的記述と自己意識の「受動－能動」構造（ibid., 24f.）

・自己意識の記述・分析（倫理学からの借用命題、内容的には、自己意識の現象学的記述）感情あるいは直接的自己意識と生の統一性・動態との関わりから、「絶対的依存感情」へ。

・自己意識を構成する契機：

自己措定性（Sichselbstsetzen）・存在すること（ein Sein）／

自己非措定性（Sichselbstnichtsogesetzthaben）・何らかの仕方で生成したこと（Irgendwiegewordensein）

↓

・意識の二重性：自らが現に存在していることを意識するとともに、他者に依存しつつ、他者と共に存在していること(Zusammensein)を意識。

主観における自発性（Selbsttätigkeit)と受容性(Empfänglichkeit)の二重性に対応。

・受動性の優位：自己はまず他なるものからの作用・触発によって自己として存立する。

⑥感情は、自由感情(Freiheitsgefühl)と依存感情(Abhängigkeitsgefühl)の両極性を持つ。

主観・自己において受容性を自発性よりもより根源的な要素として位置づけ、自己の存在とそれについての意識が他者との関係性を基盤にしていること。

cf.　近代的自我の能動性の強烈な自覚

(1)自由感情や依存感情は直接的自己意識に属している。

これらの感情は、自己像を介した自己の対象化に先立つ、自己の諸活動・諸機能の統合性における意識の動的生成のレベルの事柄。そのまま個別的な感情の前提。

シュライアマハーの絶対的依存感情を心理主義的に解釈するのは間違い。

(2)依存感情と自由感情は自己意識において両極を形成しており、相互に不可分である。

主観と他者（主観と共に措定された他者）との相互作用

→　自由感情と依存感情との不可分性。

世界内には絶対的自由感情も絶対的依存感情も存在しない(ibid., S.26)。存在するのは、相対的自由感情と相対的依存感情にすぎない。

⑦自己意識の現象学は、他なるものとの関わりを介して、現存在の現象学へと展開される。

・自己意識の分析＝世界の内における自己の存在の在り方、我々の現存在の分析へと至る。

自己意識の構造の現象学的記述から、世界内における現存在の現象学的記述へ。

・世界：

自己の存在は他から触発された受容性において成立し、常に他（人間的社会的関係や天体を含めた自然との関係）との相互作用の内に存在している。

もろもろの他なるものが一なるもの(Eines)として、つまり外部世界全体が我々自身と共にある一なるものとして措定されるとき、それは世界と呼ばれる（ibid., S.26)。

↓

我々の自己意識は世界の内における我々の存在の意識、あるいは我々と世界との共存在の意識として成立。

注意すべき点：２０世紀の現象学的存在論（シェーラー、ハイデッガー、ティリッヒらを含めた）と表面的に類似性。自己意識が「我々」の意識として説明されていること。個的自己の意識ではなく、共同体的自己の意識が論じられている。

↓

シュライアマハーの信仰論が彼の言語論やコミュニケーション論との関わりで理　解されねばならない。　cf. フッサール的な意識の現象学

⑧自己との相関性において、自己の起源は神として定義される。

・世界内の他者との関係：ここには絶対的依存感情は存在しないこと。

・敬虔さ＝絶対的依存感情：自己と神との関係。

しかし、特定の神観念 ── たとえ人格神であろうと ── を前提にしていない。

「我々の自己意識において共に措定された、我々の受容的で自発的な現存在の起源(Woher)は、神という表現によって言い表されねばならない」(ibid., S.28f.)。

まず、特定の神観念から、その神が現存在の起源であると主張するのではなく、むしろ反対に、現存在の起源の方が「神」と呼ばれるのである（神の定義)。

７．神学と哲学の関係（「リュッケへの第一書簡」）

「私の著作の中には、思弁的認識と、キリスト教は、常にお互いに区別してあるのです。なぜなら、キリスト教と思弁は調和するに違いないが、それらはお互いに属しあっているのでもなく、お互いに決定し合っているのでもないことを確信しているからです。私はこの法則から、毛ほどの隙間も逸脱もしないように最新の注意を傾けてきました。この基本の上にのみ立ち、私は、私独自の命題だけでなく、以前からある定式への私の批評すべてをも、明らかにしたのです。」(98-99)

↓

楕円と二つの焦点という関係性

８．信仰と学問の関係（「リュッケへの第二書簡」）

「活けるキリスト教信仰と、全ての面において開かれ独立して営まれる学問研究の間」の「永遠の契約」、「この契約のための基礎は既に宗教改革においてできあがっていたのです」、「教会と学問の両方を立て上げる活動に従事した」、「まさにこれが『信仰論』の立場なのです。私が確信をもって最善の努力で示すべき事柄は、すべての教理はまさに私達のキリスト教的意識の一要素を体現しており、学問とは拮抗せずに把握出来る、ということです。このことは、特に私にとって創造および保持の教理の扱いにおいて課題となりました。」(120)

＜文献・参考文献＞

０．Friedrich Schleiermacher, *Kritische Gesamtwausgabe*（KGA）, de Gruyter.

１．シュライエルマッハー『宗教論』岩波文庫、筑摩書房。
Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern (PhB 255).
On Religion. Speeches to its cultured despisers
(translated by Richard Crouter, Cambridge University Press, 1988).

Schleiermacher（1830）: Friedrich Schleiermacher, *Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhange dargestellt*（1830/31, hrsg.v.Martin Redeker）, de Gruyter 1960

２．ティリッヒ『キリスト教思想史Ⅱ』(『ティリッヒ著作集』別巻３）白水社。

３．波多野精一『宗教哲学・宗教哲学序論』『時と永遠』岩波文庫。

４．武藤一雄『神学と宗教哲学との間』創文社。

５．プレーガー 『シュライアーマッハーの哲学』玉川大学出版部。

６．ジェームズ・デューク、フランシス・Ｓ・フィオレンツァ
『シュライエルマッハーの神学』YOBEL, Lnc.
「リュッケへの第一の手紙」「第二の手紙」邦訳所収。

７．武安　宥　『シュライエルマッハーの教育学研究』昭和堂。

８．川島堅二　『Ｆ・シュライアマハーにおける弁証法的思想の形成』本の風景社。

９．大峰　顕編『神と無』(『叢書ドイツ観念論との対話』［５］）ミネルヴァ書房。

10. 芦名定道「ティリッヒとシュライアーマッハー」、『ティリッヒ研究』（現代キリスト教思想研究会）第２号、2001 年、pp.1-17。
https://sites.google.com/site/kyotochristianstudies/home/tillich/journal

11. 川島堅二氏のサイト：http://religion.sakura.ne.jp/schleiermacher/
日本シュライアマハー協会：http://www1.doshisha.ac.jp/~sgjapan/
高森昭論集：http://www1.doshisha.ac.jp/~sgjapan/archive/takamori.html
水谷誠論集：http://www1.doshisha.ac.jp/~sgjapan/archive/mizutani.html

↓

12. シュライアマハー研究史（高森昭）

・「シュライエルマッハー研究史の視点より見たる近代プロテスタント神学の一断面」（『神学研究』19 巻（関西学院大学神学部）、1972）

・「最近のシュライエルマッハー研究書について（1）」（『神学研究』22 巻（関西学院大学神学部）、1975）

・「最近の「神学概論」について」（『神学研究』25 巻（関西学院大学神学部）、1977）

・「最近のシュライエルマッハー研究書について（2）」（『神学研究』30 巻（関西学院大学神学部）、1982）

・「日本におけるシュライエルマッハー研究の 70 年（1914 ～ 1984）」（『神学研究』33 巻（関西学院大学神学部）、1985）

13. シュライアマハー研究史（水谷誠）

・「シュライエルマッハー「宗教論」受容の一形態――ディルタイ、リッチュル、オットーと石原謙との対論及び翻訳――」（『基督教研究』46 巻 1 号（同志社大学神学部）、1984）

・「フリードリヒ・シュライエルマッハー――研究の現状と方法論的諸問題――」（『基督教研究』65 巻 2 号（同志社大学神学部）、2004）

14. エーバーハルト・ユンゲル「F.D.E.シュライアマハー」（RGG 第 4 版より）、川島堅二訳。http://religion.sakura.ne.jp/schleiermacher/jungel.htm

15. *Schleiermacher-Auswahl. Mit einem Nachwort von Karl Barth*, Güttersloher Verlagshaus, 1968.